

# 一人一人の良さを活かしたアクティブ・ラーニング型校内研修の試み ～生徒も職員も学び合う「チーム三中」の再構築を目指して～

伊勢崎市立第三中学校  
教諭 池田 瑞輝

## 1 はじめに

今年度の本校の学級規模は、特別支援3学級を含めて22学級である。管理職を除いた県費職員は41名おり、県内でも比較的規模の大きい学校である。また、今年度は転入職員が14名を数え、大規模な職員の異動があった。また、40代以上の経験豊かな教員が27名と多数を占める本校では、校内研修がやや形式化してしまう傾向も見られた。このことは、平成24年度の中教審答申「教職生活全体を通じた教員の資質能力の向上について」においても指摘されているように、年齢構成の変化による校内研修の機能の弱体化が本校においても顕在化している状況にあると考えられる。

また、中学校で行われる校内研修は、教科担任制であることに由来する「教科の壁」による全校体制での協働の難しさや、放課後の部活指導があることによる時間を生み出すことの難しさなどがあり、主体的・自律的な研修を進めにくい実態がある。

しかし、昨年度末に出された中教審の答申でも、「新しい時代に求められる資質能力を育成する上では、研修そのものの在り方や手法も見直しが必要」と指摘されているように、困難な現状はありつつも、本校でもより主体的・協働的な学びのある校内研修を目指す必要性があると考えた。

多忙であるがゆえに、出張を伴う校外研修よりも、校内研修を充実させることは、学び続ける教員として本来の職務を遂行するためには効果的であろう。また、本校の年齢構成も、その豊かな経験こそが財産であり、校内研修を活性化させる強みになり得ると考えた。

本校では「学び合い」活動を授業に取り入れることで、生徒の思考力、判断力、表現力を高めることを目標に校内研修に取り組んでいる。「学び合い」に視点を置くのは今年度で3年目となり、それぞれの取組も深化しつつあるところである。「学び合い」によって生徒から引き出そうとする主体的な学習態度は、次の学習指導要領のキーワードの一つであるアクティブ・ラーニングが目指すところでもあり、校内研修における職員の取組姿勢とも重なる部分がある。

そこで、職員の経験値を活かし、互いに学び合うことで、職員間の支え合いや協働する力を引き出すようなアクティブ・ラーニング型の校内研修を試みた。その実践を紹介する。

## 2 実践のねらいと見通し

本実践では、研修の主題に向けた取組の具体化を一人一人の職員が能動的に考え、実践に結びつけることを目標とした対話的で主体的な学びの過程のある研修をアクティブ・ラーニング型研修（以下AL型研修）とする。

AL型の研修を推進することで、知識伝達型の研修よりも、一人一人が持つ良さや考えが引き出される機会が増え、研修主題について互いの良さを活かした深まりが生まれるであろう。また、自らの実践を振り返りながら、次の実践へとつなげる過程で、中堅教員は主体的に自身の専門性を高めながら若手教員を支援することで協働性を深め、若手教員は適切な指導助言のもと、自らの課題を自覚して教職としての基盤を固めるなど、それぞれの立場で互いを支え合いながら、これまで以上の機能的な結びつきのある「チーム三中」の再構築が図れるであろう。

### 3 実践の内容

#### (1) 職員の大規模な異動に対応するための全体会

今年度は職員の大規模な異動があり、校内研修について昨年度から継続している部分も含め、混乱なく理解を得て進めていく必要があった。これまでの経過も踏まえ、本校で捉えた学び合いの定義など、伝えるべき内容があまりにも多い状況であった。

そこで、一回目の全体会では、今後の研修を進めやすくするために、プレゼンテーションソフトを使い、16枚のスライドで20分程度プレゼンを行った。

特に重視したのは、「授業を変えることで生徒を変える」という校内研修に取り組む目的意識を明確にすることだった。

プレゼンテーションソフトでまとめ直すのは時間を要するが、その分、伝えたいことが音声言語だけでなく、視覚的に情報の軽重をはっきりさせながら伝わるため、今年度のように職員の入替えが激しい時や、研修主題が変わる場合などに有効な手立てになると実感した。

また、第二回の全体会では、「楽しくまじめに語り合おう」と題して、短い時間であるが職員間の交流を図る時間を設けた。

テーブルに五人程度ずつ座り、研修推進委員（委員会の詳細は後述）をテーブルホストとして配置した。はじめに一人2分ずつ、自分自身のことを語り、その後テーマについて10分程度語り合う形式とした。

テーマは難しくなり過ぎないように「制約がないとしたら、本当はどんなことが教えたか」というものにした。

これまでの校内研修では個人の思いを語る場面が乏しかったが、ここでは一人一人が生き生きと自分の考えていることを語り合い、温かな空気に満ちた時間が流れていた。

特に、はじめの2分間で自身を語る場面で、部活動に注ぐ熱い思いや、趣味のこと、前任校での思い出深い出来事など、様々な話題が出てくることで、「職員間の距離がぐっと縮まった（転入職員談）」ように感じた。

校内研修というと構えてしまう部分があるが、授業の導入がそうであるように、入口の部分では心が開放され、思いを表現しやすい場を設けることは、チームとして研修を進めるうえで有効であると感じた。

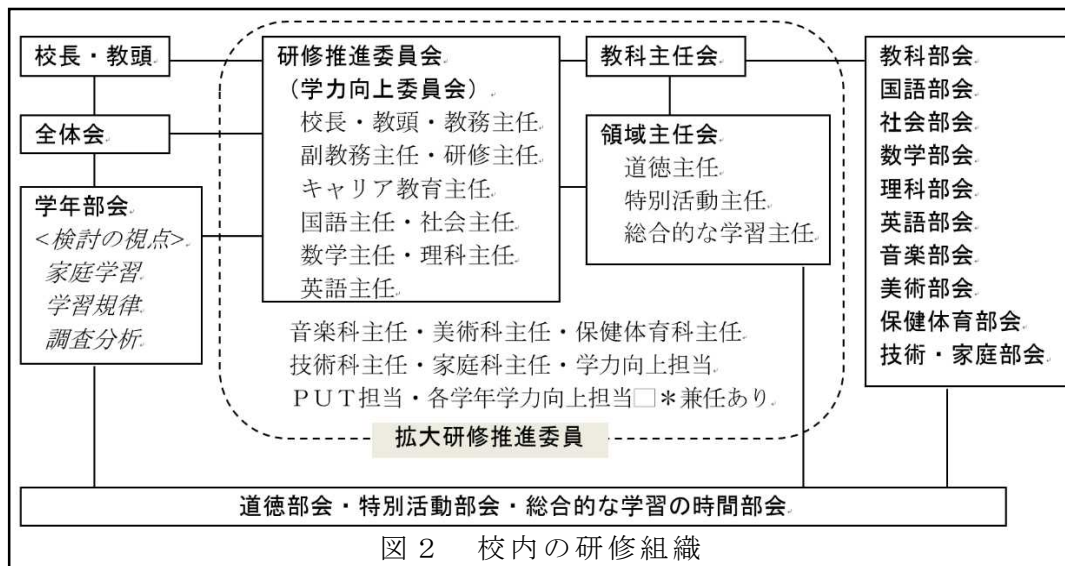


図1 楽しくまじめに語り合う様子

#### (2) 研修推進委員会（学力向上委員会）

本校では毎週火曜日の4時間目と時間割上に明確に位置付けられた研修推進委員会が設置されている(図2)。5教科主任に加え、キャリア教育主任を加えることで、技能教科(音・美・保体・技家)の立場からも意見が出されるようにメンバー構成にも工夫がなされている。

研修推進委員会では、主に校内研修の主題に関わる取組や全体会の内容の検討、全国学力・学習状況調査などの各種実態把握調査結果の分析による課題の発見や具体的な手立ての検討、研修に関わる情報交換を行っている。A L型の研修ではその意図を複数の職員が理解したうえで進めないと、何をすればよいのかを理解するだけで時間が終わってしまう危険性がある。今年度のような形態で研修を進めていくためには、時間割で明確に位置付けられた本委員会が必要不可欠な組織であろう。



### （３）協働を生むためのグループ編成

全体会では、授業の工夫改善を中心に取り扱っている。これまでは全体に情報が発信され、全体会後に行われる教科部会で研修主題について具体的な取組を検討してきた。

今年度は、「教科の壁」による協働の難しさを打破するために、教科横断的なグループ編成をし、全体会や互いの授業を参観するように計画した。

研修主題に迫るための手立てとして「学び合いによる課題追究」を設定し、それを具体化するために、以下の３つの視点を持つこととした。

- A よりよい表現のために互いの考えを活かす学び合い
- B よりよい解答を求めるために、互いの考えを広げ、まとめる学び合い
- C 答えの正しさや学んだことの価値を確かめるために、考えを深める学び合い

授業実践をするうえで、上記３つの視点のうち一つを希望してもらった。教科横断的にグループを編成するため、各班には複数の教科担当が入るように配慮し、５人組の班を作った。今年度はAのグループが４班、Bが３班、Cが１班の計８班で編成した。

班での学び合いを機能させるために重視したのはホスト役の職員配置である。本校では前述のように、研修推進委員会が設置されているため、事前に全体会のねらいを推進委員に説明することで、意図を十分に理解した職員をホスト役として配置できた。

### （４）AL型全体会①「教科のねらいに迫る『学び合い』を作ろう」

授業の工夫改善の手立てとしての学び合いと一口に言っても、具体的にどう実践するかは簡単にイメージできるものではない。そこで、編成した８つの班でそれぞれ一時間の授業を作るAL型研修を計画した。

ホスト役の職員やメンバーの教科配分などを考慮して、それぞれの班に合わせた特定の教科の授業づくりができるようにするため、研修主任として、たたき台となる授業モデルを作成することにした。

用意したのは、英語、理科、社会、数学、音楽、美術、保健体育の７教科、８種類の授業モデル（図３）である。

研修主任である私の専門は国語科であるため、まず該当教科の教科書を開くところから始め、今行われている他教科の実際の授業を把握することに取り掛かった。

参考として役立ったのは、文科省から出ている「言語活動の充実に関する指導事例集」

である。ポイントを明示した事例が掲載されているため、国語科の私でも他教科の授業のイメージがしやすく、研修に活かせると実感した。

他教科でも分かるように単元とめあてを示す。

想定されるおおまかな生徒の活動を示す。

生徒の反応を予測する欄を設けることで、実際の授業を想定したより現実に近い授業づくりができるように工夫した。

第二回校内研修 ソークショウ型研修資料

研修主題「知識・技能を定めて自ら考え表現する生徒の育成」  
副主題「学び合い」による課題追究を通して  
教科のねらいに迫る「学び合い」を作ってみよう!

教科および単元  
音楽 イメージをもとに、構成を工夫して音楽をつくろう

めあて  
表現したいイメージを持ち、音楽材の特徴を感じ取り、反復、変化、対照などの構成を工夫しながら音楽をつくることができる。

生徒の活動

①「船が近づいてきて」「目の前を通り過ぎ」「遠ざかっていく」イメージについて、船の大きさや天気、波の様子などを想像する。

②③で想像した場面について、身の回りの物や楽器の中から、ぴったりの音を探す。

④見つけた音を繰り返し、変化させたりして構成を工夫する。

⑤断片的な音の移り変わりをどう表現すればよいか考える。

⑥工夫をもとにつくった音楽を演奏する。

(3)「学び合い」の中で生まれる生徒の「つぶやき」

<個人の考えをもつ段階>

<自分の考えを振り返る段階>

班別でじっくり検討できるように、それぞれ違う教科、単元を用意した。

研修を焦点化するため、学び合いを想定する場面に絞って検討できるようにしている。

伊三中型言語活動の四分分類を示すことで、具体的な生徒の活動のアイデアが生まれやすくなった。

図3 校内研修で用いた授業モデル（英語）

その後、作成した授業案を研修推進委員会で検討し、全体会で授業づくりを考えるためのたたき台として練り上げ、全体会の場で提示した。

考えるポイントとして示したのは、①「活動形態」②「どのような言語活動が行われるか」③「学び合いの中で生まれる生徒のつぶやき予測」の3点である。

言語活動については、昨年度までの研修で「伊三中の言語活動四分分類」（図4）を作成しており、それを活用して具体的に検討できるように工夫した。

【伊三中～言語活動4分類～】27年度からの取り組み

<p>①言葉を用いて考える</p> <p>「比較する」「分類する」「予測する」</p> <p>「再構成する」「関連づける」</p>	<p>②言葉を用いて伝え合う</p> <p>「人に説明する」「表現する」</p> <p>「発表する」「～しながら聞く」</p>	<p>③言葉を読み、書く</p> <p>「記録する」「箇条書きする」</p> <p>「調べる」「読み取る」</p>	<p>④言葉を用いて人と関わる</p> <p>「話し合う」「質問する」</p> <p>「評価する」</p>
---	---	---	---

図4 伊三中型言語活動の四分分類

授業づくりの中で特に効果的だったのは③の「学び合いの中で生まれる生徒のつぶやき予測」である。

社会科の授業を検討していた班では、数学科の職員から「オセアニアとアジアをなぜ関連付けて学習するのか」という素朴な疑問が出され、生徒の「なぜ」を活かした授業展開へと話し合いが進む様子が見られた。

このように、たたき台となる教科を専門としない職員にとっては、生徒に近い、素の反応が見られ、専門とする職員にとっては、それが新たな発見となったようだ。他教科であっても、授業づくりに参加でき、協働によって授業づくりができると実感した。

参加した職員の感想は以下のようなものだった。

- ・ 同一教科だけだと固定観念があるから、他教科の意見はとても貴重である。
- ・ 生徒同士が言葉を交わし合う時間を確保するためには、活動を精選する必要があると感じた。

- ・生徒の素直なつぶやきをイメージして、そこから授業展開を想定することが有効であろう。
- ・実際に授業づくりをしてみて、「学び合い」活動を設定するために有効な場面はどこかを考えることに難しさを感じた。
- ・この研修で作成した試案で実際に授業を計画してみたい。



図5 授業づくりの様子

このAL型研修を行うことで、学び合いの授業づくりにおけるポイントを職員の意見から発見することができた。それは以下のようにまとめられた。

### 「学び合い」を機能させるためのポイント

#### ①学習規律を確保する

そのためには…ルールや意識の共有をさせる。

- 「学び合い」には学習規律が不可欠。課題追究するという目的意識や、互いに学び合うことの価値を共有できるように指導することが必要。(A1班)

#### ②活動時間を確保する

そのためには…単元や一単位時間での学習活動の精選をする。

- 「学び合い」を授業に落とし込んでいくためには「学習活動の精選」をして十分な時間を確保する工夫が必要。(B1班)

#### ③ツールを与える

そのためには…シンキングツールや発表ボード、付箋紙などを活用する。

- 「学び合い」を十分に機能させるためには、場面設定やツールを準備しておくことと活動時間を確保する必要がある。(A3班)

#### ④意図的なグループ(ペア)編成をする

そのためには…生徒の実態を把握する。

- ペアでの学習をする場合は、互いの良いところを見つけて学習効果を上げるために、意図的なグループ編成が必要であろう。(A1班)

### 「課題追究」を効果的に行わせるためのポイント

#### ①生徒の興味関心を活かした課題設定をする

そのためには…他教科の教員の意見を活かす。生徒のつぶやきを具体化する。

- 生徒の「なぜ」で授業を作るためには、新鮮な視点が持てるとよい。特に他教科の意見が有効である。(A2班、B3班)
- 生徒のつぶやきをイメージすることで、「なぜ」で始まり、「なるほど」で終わる授業計画が立てられる。(B3班)

#### ②一人一人の生徒の思考を活かす。

そのためには…全員同じではなく、いくつかの視点、観点で課題を与え、それを持ち寄って学び合わせる。

- 「広げる」場面に有効に機能させるには、全員が同じ視点で取り組むよりは、違う視点で課題解決に迎えるような仕掛けがあるほうが有効。(B3班)

このAL型研修は、能動的な学びの時間となったため、作成した教科の授業づくりの枠を越え、どの班からもすべての教科に通じるような意見の深まりが得られ、非常に充実した時間となった。

### (5) AL型全体会②「一人一人の思いを活かすブレインライティング」

独立行政法人教員研修センターから出されている「教員研修の手引き2015」を参考にして、ブレインライティングという手法を用いてAL型の研修を行った。

ブレインライティングは、他のメンバーの発想をヒントにしながらアイデアを生んでいく手法で、ブレインストーミングを紙に書きながら行う発想法である。本校では、最大15のアイデアが書き込めるA3サイズのワークシートを各班に人数配布し、一班につき、75のアイデアが出されるように準備した。

テーマは「課題追究場面で生徒が生き生きと学び合い活動をするための工夫」とした。



左上：前の人を書いたことをヒントにして付箋紙にアイデアを書き足している様子。  
右上：出されたアイデアを分類している様子。  
下：班で出された意見を発表している様子。



図6 研修の様子

多くの職員が過年度までの授業実践で気づいたことや、授業づくりのAL型研修で得た気づきなどをスタートの付箋紙に書き込んでいた(図6)。ブレインライティングはそれぞれの気づきを手がかりとする手法のため、発想が広がり、日ごろの授業で活かせる具体的な手立てが多く出される実践的な研修になった。

この研修によって、「興味・関心を持たせる工夫」や「苦手意識のある生徒への支援の工夫」など大きく分けて15分類される視点で、合計200を超えるアイデアが出され、共有されることになった。

全体会后、出された意見を今後の授業実践に活かすために、「学び合いのある授業を作るためのチェックリスト」としてまとめたものを以下に示す。

このリストは、二学期以降のスキルアップ研究授業や要請訪問の授業づくりなどで活用されている。

#### <授業デザイン>

- 魅力的な学習課題が設定されているか？
- 学び合い型の授業の流れ(個人→学び合い→個人)になっているか？
- 課題追究をさせるための時間を十分に確保しているか？
- 個人の考えを持たせるための時間を十分に確保しているか？

- 学び合いの基盤となる学習のスキルは身に付けさせているか？
- 学び合いのルールは徹底しているか？
- 効果的な場面でグループワークを入れているか？
- 学び合いの成果を実感できるような学習の振り返りを計画しているか？

<一人一人を生かす>

- 生き生きと学び合えるような集団づくりを工夫しているか？
- 多様性や個性を認める評価や言葉かけを与えているか？
- 一人一人が参加できるように役割や機会を与えているか？

<学習促進・支援>

- 学習の手順やひな形などのモデルは示しているか？
- 思考・分析などのツールやホワイトボードなどの教具を効果的に使っているか？
- 生徒の状況に応じて適切なヒントや支援を与えているか？

(6) 全体会の学びを一人一人のスキルアップに結びつける研究授業

本校では年間一人一回の授業公開をしている。校内では「スキルアップ研究授業」と呼び、同一教科で参観し合う取組を続けている。今年度は、全体会との結びつきをより明確にするため、同一教科以外に、全体会で組んだ班のメンバーにも授業を公開することとした。

また、多くの教員が複数クラスを受け持っているため、同一指導案による授業実践が可能であることを踏まえ、同一指導案による複数授業公開制を導入し、参観の機会を増やす工夫をした。

複数公開にすることで、自身の授業との重なりを避けて参観日を選べるため、研修主任として参観する立場としても非常に有効な手法であると感じた。

その他、校内研修と関連付けるために指導案形式(図7)に示した工夫点は以下のとおりである。

- ・「学び合い」で生まれる生徒のつぶやき予測記入欄
- ・次の実践につなげるための参観者の意見記入欄
- ・短い時間でも効果的な参観を実現するための15分の見どころ枠

生徒のつぶやきを予測するのは、AL型研修で行った授業づくりでその有効性が確認できたため、日常の公開授業でも取り入れた。また、

参観者の意見記入欄は、一人一人の良さを活かそうとする本実践において重要な取組の一つである。

英語科のT教諭のスキルアップ研究授業を参観した際、授業後に思いついたところを記入してT教諭に渡したところ、返ってきたものが図8である。国語科である私の意見を真摯に検討し、同じ指導案で臨む別クラスの実践に向けてワークシートを改善し、活動の形態も工夫が新たに加えられ、

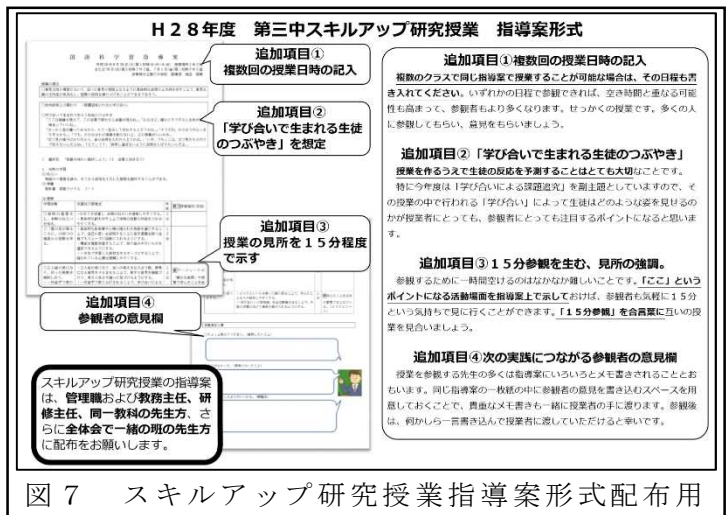


図7 スキルアップ研究授業指導案形式配布用

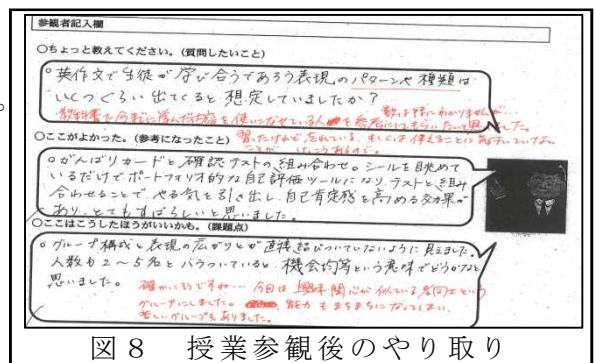


図8 授業参観後のやり取り

すぐに授業改善に結びつけていた。なかなか真似のできることはないかもしれないが、校内研修で目指すところは生徒の変容にある。そしてそれを実現する主たる場は授業実践であることを考えれば、「教科の壁」を超えて授業後に互いに生徒のために意見を交わし合うことでねらいに迫ろうとしたこの実践は、非常に有意義なものであると考える。

### (7) 模擬授業

校内研修の成果を見せる一つの機会として市教委による要請訪問がある。本校では毎年2授業を代表授業として実施し、授業研究会を行って研修での学びを深めている。しかし、「教科の壁」を一番感じるのがこの要請訪問時の代表授業である。

代表授業者は高い専門性を発揮し、様々な工夫をして生徒の理解を深める授業を実践する。しかし、そのことが他教科の職員にとっては理解の及ばない壁となり、授業研究会も該当教科の職員以外は深まりにくいことにつながる。



図9 模擬授業の様子

そこで、今年度は要請訪問へ向けて、校内研修では初めての模擬授業を実施した。全体会の8つの班を2つに分けて、英語と理科の代表授業者の模擬授業に参加することとした。

模擬授業では、「授業者」「生徒役」「分析役」の3つの役割に分かれ、それぞれの立場から授業に参加し、意見を述べ合った。初めての試みで当惑する場面もあったが、研修推進委員の働きで、本実践へ向けて多くの発見のある時間となった。

特に「教科の壁」を超えるという点では、実際の授業の流れを体感することで、授業の視点や活動のポイントが見えてきたことが大きな成果だった。

参加者の感想として以下のようなものがあった。

- ・初めは模擬授業への抵抗感もあったが、やってみたら気づきが多く生まれ、やってよかったと感じた。「聞き手の立場になって…」と何気なくかけている言葉も、先生方が生徒の立場になることで実感を伴って理解することができた。(英語・授業者)
- ・生徒の動きを確認することに関しては有効であった。実際に活動してもらうことで反応の予測もできた。(理科・授業者)
- ・生徒役として先生方が本気で分かろうとしていたことが素晴らしい。(研修推進委員)
- ・本校のテーマに則った活動がよく見えた。その中で課題も少し見えたので成果があったように思う。(分析役)
- ・検証の的が絞り切れていなかった。授業者は悩みどころをもう少しはっきりさせるとよい。(研修推進委員)

最後の感想にあるように、初めての試みであったため、論点を絞り込んでおく準備が十分にできなかったことは反省として残った。しかし、当初のねらいであった協働性を深めることに関しては一定の成果があったと考える。

### (8) 校内研修通信「研魂(けんたま)」による一人一人の良さの紹介

一人一人の良さを活かし、互いに学び合おうとするとき、多くの職員が持っている美德が一つの弊害となることがある。それは謙虚さである。それぞれに素晴らしい実践をしても、それを表立って他者に示すことが少ないのが多くの職員室で見られる傾向ではないだろうか。

「チーム三中」を掲げ、一人一人の良さを活かそうとする校内研修の姿勢を全職員に示



すため、取り組んだのが校内研修通信である。校内では「研魂（けんたま）」と呼んでいる。

毎号一人の職員に光を当て、その職員から学び取りたい実践を紹介している。

校内研修で主題としている生徒の思考力、判断力、表現力の育成には、授業の工夫改善はもちろん、学級をはじめとする集団をよりよくするための工夫も求められている。「研魂」では、授業だけでなく、部活経営なども取り上げ、様々な角度からアプローチできるように工夫している。



図 10 実際の「研魂」

#### 研魂への職員の感想

- ・埋もれている先生の良さを紹介することは、教員間の距離を縮めてくれると思う。
- ・先生方の工夫されていることがわかりやすく書かれていて、とても参考になるし、興味深い。

通信による紹介は好評で、互いの実践への関心が高まり、静的な学び合いが生まれている。この「研魂」には、校内研修の全体会と日常の実践とを結びつける効果があると感じた。全体会が「動のAL」であるならば、「研魂」は能動的に読むことで自らの実践に活かそうとする「静のAL型」の通信を目指し、発行を継続している。

#### (9) スキルアップティーチャー (SUT) の活用

今年度の学力向上への取組の目玉のひとつとしてスキルアップティーチャー（以下SUT）の存在がある。本校には3名のSUTがおり、合計で週16時間程度、学年や教科に関わらずT2として授業に参加し、生徒への学習支援をしている。SUTの役割は、言葉の示すとおり、「授業がわかると楽しい」ということを実感させながら、学び方や学ぶ意義について理解を促し、着実に学力向上を図ることにある。

これまでの取組の中では、個別の支援も当然あるが、授業展開に沿って「互いの顔が見えるように身体を向けて話し合う」「最後まで意見を聞いてから発言する」「教科書に引いた線を相手に見せながら話す」など、生徒同士の学び合いを効果的に促進させるような指導をすることで、SUTの入らない時間でも学びを支え合う関係が持続すると感じている。

一方で、職員に対しては、特に若手教員の授業にT2として入りながら、授業後に具体的な場面を挙げながら助言をすることも行っている。また、校内研修と日々の実践を結びつけるために、スキルアップ研究授業を参観することもSUTの役割である。

SUTとして授業に入る中で気づいた生徒や学級の課題、授業展開の課題などは研修推進委員会で取り上げ、教科や学年を通じて指導の改善に役立てるようにしている。

このように、SUTは日常の中で効果的に生徒同士の学び合いを支え、職員間の支え合いの一助となる「チーム三中」の再構築に欠かせない存在となっている。

## 5 成果と課題

<成果>研修に関して行ったアンケートの結果によると、「学級経営や授業について、日常的に同僚と会話して情報交換している。」に対して、当てはまると答えた職員は84%。「互いの強みや良さを活かすことを意識して職務を遂行している。」に当てはまると答えた職員は87%。同じく「組織の中でも常に当事者意識をもって研修に取り組んでいる。」に当てはまると答えた職員は87%と、いずれも非常に良好な結果となった。また、「今年度の研修形式について」の記述回答では以下のような記述が見られた。

- ・講義や説明の形式よりも実があるものになった。
- ・他の先生方の考え等を聞くことができ勉強になった。また、積極的に研修に取り組むことができ、有意義な時間になっている。
- ・幅広いテーマで取り組み、他の先生方や他教科から着想を得られた。
- ・研修を行う中で日ごろ授業について悩んでいることを自然に話し合えてよかった。
- ・AL型は楽しく組み立てて意見が活発に交換されるので良い。
- ・授業を組み立てる際に、今までと異なる展開を心掛けるようになった。

この結果からもわかるように、従来の知識伝達型の研修よりも、AL型の研修に充実感や有用感を得ている様子がわかる。校内研修の時間だけでなく、職員室でも実践した授業の工夫について質問し合ったり、その手応えや生徒の学び合いの様子をごく自然に語り合ったりする様子が日常化しており、これはAL型研修の大きな成果であると考えられる。

また、生徒に関しては、生徒用の学校評価アンケート「授業の中で友達と『学び合う』ことは学習内容の理解に役立っているか。」に対して、約91%の生徒が役立つと答えていることから、教室の中でも学び合うチームができていくことがわかる。これは、「ペア、グループ、全体等、一時間の中で他とコミュニケーションをとる活動を必ず取り入れ、学び合いの素地を作るようにしています。(職員アンケート)」のように、校内研修を活かした実践が主体的に繰り返されていくことで、学び合いが日常化し「生徒同士が自然と教え合う場面が昨年よりも増えた。(同アンケート)」ことで、生徒自身からもその効果を実感できたことが要因であろう。

本実践を通じて、AL型研修は職員にも、生徒にも効果があり、「チーム三中」の再構築に有効であることが確かめられた。中堅教員は自身の専門性を主体的に高めるために、能動的に校内研修を活用でき、一方、若手教員は経験豊かな教員と意見交流する機会を校内研修の場に見いだすことができるため、計画的に教職としての基盤固めを図ることができることがわかった。また、継続的に全職員が研修主題に取り組んだことで取組が徹底し、生徒同士が学び合いの意義を理解し、互いの学習を促進し合う絆が生まれた。

<課題>本実践は取組を始めたばかりである。年間を通じて研修主題に向けて、手立てを具体的に探ったり気づいたりする段階、授業実践などで確かめる段階、それぞれが得たものを補充深化する段階、校外の専門家に取組の評価や助言をもらい改善していく段階など、計画的な運営をすることで、より深まりのある研修が実現すると思われる。

課題を踏まえ、今後は、さらに発展的で体系的なAL型研修を目指していきたい。

### <参考文献>

- 「チーム学校」を創る 高木展郎・三浦修一・白井達夫著  
教員研修の手引き2015 独立行政法人教員研修センター  
「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」平成27年度中教審答申  
「教職生活全体を通じた教員の資質能力の向上について」平成24年度中教審答申  
【中学校版】言語活動の充実に関する指導事例集 文部科学省編